

海を渡る花嫁への一考察 (2)

ーバーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通してー

嘉 本 伊都子*

要 旨

2016年にハワイ大学出版会から上梓されたピクチャー・ブライド・ストーリーズの著者バーバラ・川上（旧姓 オヤマ）自身、1921年に熊本で生まれ、わずか3カ月で両親とともにハワイへ渡った。1920年には淑女協定、すなわち日本政府が写真花嫁へのビザ発給を自主的に停止した。1924年のいわゆる排日移民法によって、海を渡る花嫁は途絶える。バーバラは1909年から1923年にハワイへ写真花嫁としてきた一世のライフ・ヒストリーを丁寧に取り取っている。特に、写真花嫁たちの定位家族と生殖家族の双方の輪郭がわかる貴重な本である。本研究ノートは、なぜ写真花嫁たちが海を渡ったのかを定位家族に着眼し分析する。

キーワード：ハワイ、バーバラ・川上、写真花嫁、
定位家族

はじめに

本稿は本誌21号に掲載された「海を渡る花嫁への一考察 (1) ーバーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通してー」（嘉本, 2019）の続編としての (2) である。写真花嫁とは、19世紀末から20世紀前半、ハワイや北米へ出稼ぎに行った日本人男性が郷里の女性と写真を交換し、花婿の写真を手に海を渡った花嫁をさす。かつての写真花嫁たちに1980年代半ばにインタビューしたBarbara F. Kawakami著“Picture Bride Stories” (2016) を紹介しながら、考察していく。再掲した図表1「バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト」は、ハワイ到着順に花嫁たちを並べかえたものである。バーバラ・川上（以下、バーバラと表記）は*欄で示したようにB01、B02とナンバリングした順番に「物語」を執筆している。

本稿では、頁数などの表記は煩雑さを避けるため

* 京都女子大学 教授

に、例えばB09のフジモト・キクヨであれば（花嫁番号、原著の頁数）、すなわち（B09, 160-173）と表記する。“Picture Bride Stories”（2016）からの引用は、すべて嘉本による訳である。誤訳等あればご一報いただきたい。（3）にて訂正したい。

「海を渡る花嫁への一考察（1）」では、図表1のB08キシ・オキ・ツジムラまでが考察の対象であった。ただしB06は、B14、B15、B16とあわせて沖縄からの写真花嫁たちとして紙面を改め（3）で考察していく。よって本稿（2）は、山口県出身のB09とB10、福島県出身のB11とB01、熊本県出身のB12、

B13を考察の対象とする。B01のクマサカ・カクのみハワイ到着順ではなく著書の冒頭に紹介されている。彼女がハワイにきたのは日本政府が写真花嫁へのビザ発給を自粛した1920年よりも後の1922年である。なぜバーバラがカクを冒頭にもってきたのか、その意図はわからない。カク以外は、花嫁がハワイへ到着した順番に「物語」が並んでいる。ナンバリングもなく、花嫁の名前、花嫁を象徴するフレーズ、出生年と没年、出身地、ハワイ到着の年月日が各花嫁の「物語」が始まる冒頭にはそえられている。

本研究ノートは、移民史としての写真花嫁ではな

図表1 バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト

	*	来布年	名前	旧姓	出身地	生年・享年
1	B02	1909	Hisa Kawakami	Okabe	福岡県朝倉郡長者町	1889-1978
2	B03	1911	Soto Kimura	Shigehiro	山口県玖珂郡岩国市	1892-1990
3	B04	1913	Tatsuno Ogawa	Aoyama	広島県神石郡さんまんまち	1892-1991
4	B05	1913	Tei Saito	Shida	福島県信夫郡鎌田村	1892-1989
5	B06	1914	Ushii Nakasone	Shimabukuro	沖縄県（現在沖縄市）美里村	1897-1990
6	B07	1915	Fuyuno Sawai	Tani	広島県双三郡和田村（現在の三次市）	1895-1991
7	B08	1915	Kishi Oki Tsujimura	Oki	広島県安佐郡可部村	1896-2002
8	B09	1916	Kikuyo Fujimoto	Murashige	山口県岩国市	1898-2008
9	B10	1916	Shizu Kaigo	?	山口県いこち村（伊陸か？）	1896-1998
10	B11	1917	Haruno Tazawa	?	福島県安達町（夫新潟出身）	1897-1994
11	B12	1918	Taga Toki	Inokuchi	熊本県八代郡	1901-1991
12	B13	1918	Ayako Kikugawa	Murayama	熊本県鹿本郡米野岳村	1899-1997
13	B14	1920	Kama Asato	?	沖縄県宜野湾市普天間	1904-1989
14	B01	1922	Kaku Kumasaka	Konno	福島県伊達郡湯野村	1899-1987
15	B15	1922	Kana Higa	Nakao	沖縄県国頭郡羽地村	1901-2001
16	B16	1923	Ushi Tamashiro	Kakazu	沖縄県那覇市国場	1902-1986

*バーバラ・川上は、B01から昇降順に執筆している。

（Kawakami, 2016）をもとに嘉本作成（嘉本、2009）より引用

く、バーバラが丁寧に聞き取っている写真花嫁が生まれ育った定位家族に焦点をあてることで、20世紀初頭の庶民の生活を浮き彫りにし、なぜ海を渡ったのかを考察する。バーバラ・川上の『ハワイ日系移民の服飾史』（1998=1993）に訳者の香月洋一郎がバーバラ本人に確認して判明した範囲で、固有名詞の漢字が表記されている。よって、判明している場合は漢字表記を本稿でも取り入れた。

山口県出身の花嫁のなかに、ハワイの王家と深い関係にあった珍しいケースが採録されている。ハワイへ渡った花嫁たちは、前回紹介したように、ハワイ王国と日本政府が合意した官約移民にその端緒がある。ハワイの最後の女王に仕えた夫をもつ写真花嫁のケースを通して、ハワイ王国の滅亡までを概観しておく。

1. ハワイ王国（1795-1893年）の滅亡と写真花嫁

1. 1. ハワイ王国（1795-1893年）の滅亡

(1) でも述べたように、ハワイのカラカウア王が1881（明治14）年来日し、訪日目的の一つであった日本人の契約労働者をハワイに送り込むいわゆる官約移民の道を開いた。官約移民時代は1885年からハワイ王国が滅亡する1894年までで、明治政府とハワイ王国の契約に基づいて一定の期間労働をした。ハワイが共和国になると、私約移民、自由移民としてハワイに渡った日本人男性が多くなる。彼らのもとに写真花嫁として海を渡る日本人女性も増加した。

米国がハワイを支配下に置こうとしていることに危機感を抱いていたカラカウア王が来日した際、まだ当時満6歳だった姪のカイウラニと日本の皇族山階宮定麿王親王（のちの東伏見宮依仁親王）との縁組を明治政府に申し出た。しかし、アメリカとの関係が複雑になることを懸念した明治政府は、前例がない、「許嫁」がすでにあるからという理由で丁重に断った（川上，1994：77-80）。不平等条約下の非西洋の国という意味ではハワイも日本も同じ政治地理学的状況であったといえよう。

カラカウア王死去後、53歳で妹のリリウオカラニ女王が即位したのは1891（明治24）年1月であった。ハワイの権力の大半を白人が把握している状況を憂慮した女王は、「ハワイアンによるハワイ王朝」の権威回復を図り、新憲法を公布する。しかし、アメリカ人サンフォード・B・ドールらが軍事力を背景に1893年に革命を起こし、暫定政府を樹立した。リリウオカラニ女王は流血の事態を回避するためにみずから退位し、ハワイ王国は滅亡した。翌年ハワイの軍事拠点の重要性を再認識したアメリカ議会は正式にハワイ併合を決定する。その背後には、ハワイの白人勢力が「この島は既に日本人で溢れかえって」と日本脅威論を主張していた（矢口，2002：187-196）。ハワイの日系人の人口割合は、1890年頃は14

%ほどであったが、1900年以降40年までは約40%前後を占めていたのである（飯田，2003：19）。白人たちがハワイを日本人が植民地にしようとしているという脅威を感じるほどに1890年代に急増していた。

ハワイ王国の最後女王となったりりウオカラニは、1895年にハワイ共和国打倒の動きに協力した咎で有罪判決が下され、ワシントン・ブレイス¹の自宅で軟禁されたまま余生を送った。この白亜の館は、1922年以降ハワイ州の知事邸宅として使用され、現在でも観光名所の一つとなっている。

今回考察する花嫁たちは1892年以降の出生コホートであり、そのころハワイでは大きな政治的な変化を経験していた。ワシントン・ブレイスで余生を送っていた最後の女王リリウオカラニの執事として仕えたフジモト・ヒコスケに嫁いだ写真花嫁がいた。B09のフジモト・キクヨである。

1. 2. 写真花嫁のピークと出身地：1916年から1918年

1915年から1920年のいわゆる淑女協定で花嫁へのビザ発給を自粛するまで、外務省がどれくらいの渡航ビザを許可したかを柳澤幾美は調べている。図表2『「写真結婚婦人」呼び寄せ証明発給数・渡航数』（柳澤，2006：131）によると、毎年1000人単位で花嫁がハワイへ実際に到着し、アメリカ本土にも1000件単位で証明書発給が行われていた。今回考察の対象となる6人のうち5人は1916～18年にハワイに到着しており、この期間は毎年2000人近い日本人女性が、写真花嫁としてハワイやアメリカへ海を渡って嫁いでいったピークであった。

前回の（1）で考察対象であった1889年出生を含む1890年代前半の出生コホートの彼女たちが、ハワイに到着したのは1909年から1915年であった。B08キシ・オキ・ツジムラは1896年生れであり、本来は今回の考察対象の1890年後半の出生コホートに属する。B12のタガ・登喜は1901年生れであるが、沖

1 リリウオカラニ女王は、この館を建てたアメリカ人貿易商、ジョン・ドミノスの息子と結婚していたため、失脚後、1917年に亡くなるまでワシントン・ブレイスで過ごした。ワシントン・ブレイス財団のホーム・ページより。
<http://www.washingtonplacefoundation.org/history> 2019年8月10日アクセス

図表2 「写真結婚婦人」呼び寄せ証明発給数・渡航数

西暦 (元号)	ホノルル 証明書発給数	ホノルル 実際渡航	アメリカ本土 証明書発給数
1915 (大正 4)	1,684	967	1,145
1916 (大正 5)	1,459	1,065	1,092
1917 (大正 6)	1,662	1,394	1,244
1918 (大正 7)	1,392	1,071	1,471
1919 (大正 8)*	985	780	1,078
合計	7,182	5,277	6,030

出典：『日米ニ於ケル排日問題雑件写真結婚廃止問題第一巻』外務省外交史料館史料 3 門 8 類 2 項 399-11号より柳澤作成（柳澤、2006:131）したものを引用。*1919年は10月まで

縄の女性たちを (3) でまとめて考察する都合上、今回の考察対象とする。図表1からもわかるように、バーバラが“Picture Bride Stories”に採録した16ケースの出身地を多い順番に並べてみると、沖縄4、福島3、広島3、山口3、熊本2、福岡1となる。

飯田耕二郎が、1929年版の『日布時事布哇年鑑』を利用して、都道府県別の日系人の出身地を分析している（飯田、2003：33-58）。1920年で写真花嫁のビザが発給停止になった後もハワイでは呼び寄せ移民としての写真花嫁が到着した。一世の呼寄せも終わり、永住定着時代に入ったことから1929年版を使用した飯田によると、ハワイ全体の総数のうち最も多いのは1位－広島、2位－山口、3位－熊本、4位－沖縄、5位－福岡、6位－新潟、7位－福島（飯田、2003：43）となる。バーバラが採録した花嫁は新潟を除き、上位7県をほぼ網羅している。外務省調査局が調べた『昭和十五年海外在留邦人調査結果表』から石川友紀が作成した表「日本における道府県別海外在留者」によると1940年では、1位－広島、2位－熊本、3位－沖縄、4位－福岡、5位－山口、6位－福島、7位－長崎となっており、ハワイへの移民は全世界へ移民していった特徴ともほぼ重なる（石川、2005：12）。

バーバラのインタビューした写真花嫁のうち沖縄が最も多い4人であるのは、比較的移民を始めるのが遅かったゆえにインタビュー時である1980年代半

ばでの生存確率が高かったと考えられる。石川によると官約移民時代の後で、1900年に初めて26名が沖縄から集団移民としてハワイへ到着している（石川、2005：14）。

2. 山口県出身の写真花嫁－フジモト・キクヨと皆合シズ

2. 1. 裁縫を学ぶ場と写真花嫁

1898（明治31）年10月16日、山口県岩国市で生まれた旧姓ムラシゲ・キクヨ（B09, 160-173）には、姉妹5人、兄弟4人もいるうえに、父の仕事柄弟子もいて、大家族であった。父は教育のある熟練した工芸の職人で神道の儀式に使う装飾品や石の鳥居を制作した。代々その一家が受け継いでいる家業で、7人の弟子たちが父を支えた。

母親は子どもたちの世話で忙しく、弟子たちにもご飯を作った。大家族にもかかわらず、キクヨは学校へ10学年まで通うことができた。高等科では歴史、音楽、数学、地理、作文などを学んだ。それより上級のクラスになると、少女たちは着物の縫い方、手芸、結婚への礼儀作法などを学んだ。歌うことも習ったがキクヨの声はひどかったので、代わりに三味線をならい長唄を10歳から習った。三味線と唄いは休むところはきちんと間をおかなければならなかった。練習を要したが、長唄を謳うことは楽しかったと回想している。歌うと長唄を謳うことが区別

されている。

祖母から「なんでも学びなさい。よく学びなさい。学ばなくてもいいことは人から盗むことです」と教えられたキクヨは、家事などを手伝わなくてもよかった。高等科の後、裁縫の学校に30人の生徒と一緒に通った。子どもの着物の基礎から大人のサイズへ、レベルを上げ、絹の着物は正装の紋付、短い羽織、帯、袴と習い、複雑なカットやフォーマルな着物を縫うことができるようになった。そこで先生は、キクヨに授業料を免除し他の学生に教えることを許可した。

山口県から送ったと思われる旧姓ムラシゲ・キクヨの写真(B09, 161)は着物に羽織、右手に別珍ではないかと思われるショールを手に立っている。髪は庇髪にしている。左には、テーブル・クロスのかかった机上に2冊ほど本が積んである。

結婚は、この裁縫の学校が結節点となる。未来の夫ヒコスケの母が息子のために嫁を探していたとき、ヒコスケの姉妹が同じ裁縫学校に通っていたため、彼女たちによってキクヨが推薦されたのである。後に同じ裁縫学校からもう一人写真花嫁としてハワイに嫁いだこともわかる。

このように山口では裁縫を習う場が写真花嫁の送り出しに機能していた可能性がある。後述のB10皆合シズも裁縫の先生の甥に嫁いでいる。裁縫を習うことができたのは、比較的裕福で、畑仕事を娘がしなくてもいいという条件が必要になる。その意味では、家の家格が釣り合う嫁候補を見つけるなど年頃の若者や彼らの家柄の情報交換をする場所でもあったのではないか。

早速、ヒコスケの家族はナコオド(仲人)に花嫁候補の家族や家系を調べさせた。仲人の調査に義理の両親は喜んだという。そこで仲人がキクヨの両親のところへやってきて、キクヨをヒコスケの嫁に欲しいといった。新郎の両親や親戚はみないい人であった。「日本では、花嫁を選ぶときはまず、両親の性格を最初に判断しろといいます」とバーバラに教え

た。

キクヨ自身は家族を離れ、一度しか写真でみたことがないような人のところへ、しかも知らない土地で暮らすことに躊躇した。しかし、母親は娘にとってハワイへ嫁ぐことは素晴らしいチャンスだと考えていた。キクヨは祖母に「お願いだから、結婚には反対だといってくれ」と頼んだ。大家族のなかからただ1人見知らぬ土地で結婚するということは、だれも子育てを助けられないだろうということを意味していたからである。後にキクヨがハワイで出産した際に、産婆へのお礼をはずんだのは、親戚でもない女性にお世話になったからであろう。しかもその額は破格であった。嫁ぐ前のムラシゲ家がいかに裕福だったかは、結納金の総額をみてもわかる。

娘に拒否権はなかった。両親によって結婚が決まると、夫の岩国の村で夫の弟が代理となって三々九度の婚礼を挙げた。その後岩国の役場に行って、フジモトの戸籍にキクヨの名前が登録され、両親の家へ帰り6ヶ月待った。ビザが発給されるまで、すなわちハワイに妻として法的に認められるまでそれくらいかかったと説明している。

キクヨは、ハワイに布団を持っていくことになる。

布団は、熱帯の気候のハワイには不要と母はいいましたが、鎌倉から母の兄が着た時に布団がないことを知り、「誰が婚礼布団なしでと嫁ぐ?」といってどこからか用意してきました。出発の日のことです。忘れもしません父の最後の言葉「嫁に行ったら、二度と戻ってくるな」でした。私はつらくて、泣きました。広島駅で何をみたかさえ覚えていません。道中ずっと泣いていたのです。両親は私が日本に嫁いでも同じことをいったでしょう。結納金の総額は2000円もしました。それは弟の教育に使うのに十分なお金だったのですから。(B09, 163)

写真花嫁の中には、嫁入り道具が不要で身ひとつ

で嫁ぐことができるからと動機を語った花嫁もいた(真壁, 1983: 163)。一方で、布団を持っていける裕福な花嫁もいた。後ほど福島から布団を行李につめてハワイに嫁いだハルノ (B11) を紹介する。ハワイ熱が吹いていた山口ではハワイに布団は必要ないことを母親は知っていたが、一方、鎌倉に住む母親の兄にはその知識はない。だが長兄の言う事にはしたがっている。バーバラの聞き取りは、定位家族のなかの権力構造まで把握できる。

山口県からもう一人裁縫の先生が縁でハワイに写真花嫁としてきた女性がいる。Kaigo Shizu (B10, 174-193) は、皆合 (バーバラ・川上, 1998: 55-56) というかなり珍しい苗字である。シズは山口県のIkochi村出身とあるのだが、伊陸、すなわちイカチの間違いではないかと思われる。山口県の玖珂郡伊陸村 (くがぐんいかちそん)²は、1954年3月に柳井市に併合されている。同じ玖珂郡の出身のB03 木村ソトも農作業をしたことがなく、裁縫を習っていた (Kawakami, 2016: 56-57)。

1896 (明治29) 年に生まれたシズは4人の兄弟がいて、男の兄弟は父親が田んぼを増せるように手伝い、みな働きものだった。ところがシズが3歳半のときに母親が死去し、翌年父は再婚する。継母はとても「ヤサシイ」人で、誰も彼女の陰口をいう人はいなかった。継母のおかげでシズは畑で大変な仕事をしなくてもすんだという。

その代わり、継母は私を村で有名な裁縫学校に行かせました。9つのときのことです。学校の後や週末も8学年つまり14歳になるまで裁縫学校には通いました。裁縫学校の島田先生には10人ばかりの生徒さんがいて、だいたい裕福な家の方々でした。先生は伝統的な男女の正装の縫い方に知識のある有名な方でした。

私が正装から普段着物まで修得できたのはな

んと光栄なことでしょう。正式な男性の袴、羽織、紋付、丸帯、最も難しいのは優雅な比翼でした。同じ先生から日本刺繍や生け花、礼儀作法を学びました。着物を縫う事やハワイに来る前に手芸を先生から学ぶことが大好きでした。(B10, 175)

シズは、裁縫学校の尊敬する島田先生に「ハワイノラクエン」へ行くことに興味があるかと聞かれる。

19歳になったばかりのころでした。ハワイネツ(熱)のことをもちろん聞いたことがありました。みな黄金の楽園に行ってみたいと思っていました。センセイは彼女の甥っ子の写真を見せてくれました。彼の写真花嫁になる気はないかとおっしゃったのです。(B10, 176)

恥ずかしさのあまり、彼の写真をシズはちらっと見ただけであった。それでも彼はとてもいい人のようだと感じた。「もし日本にいれば、学校にはもう行くことはないでしょう。海外への知識はほとんどなかったので、お裁縫の先生から聞かれたとき、外国で新しいことを学ぶことは面白いに違いないと思ったのです。」(同) 彼女の冒険的な精神が写真花嫁として嫁ぐことを決心させた。

1915 (大正4) 年前後の山口県の農民のなかでも比較的裕福な家庭の娘は畑仕事をしていない。裁縫の学校に通っている。公的な学校というよりも、花嫁修業をふくめ裕福な家庭の子女向けであろう。B09のキクヨも裁縫学校へ通っていた。

1893 (明治26) 年生れの岡山の女性のライフ・ヒストリーをまとめた『口述の生活史、ある女の愛と呪いの日本近代』(御茶の水書房1977, 増補版1995)によれば、松代の母親は、1人娘だったことから学校で字も習い、お裁縫にも通って、夜なべして裁縫を

² 市町村合併が行われても、小学校は、その土地のもとの村や町の名前を付けられることが多く、人口減少で小学校も閉校や統合になるエリアも多いなかで、伊陸小学校はまだ存続している。このように小学校の名前を聞き取っていたら、小学校から地名を探すことも可能であるが、バーバラは小学校の名前には関心がないようだ。高等女学校の場合は固有名詞を聞き取っている。

していたのに、娘の松代には「いっぺん言うて（教えて）も、今度ァ（次には）はや忘れて、知っておらん。そんなもんじゃア教えても馬鹿らしい」（中野編, 1995; 36）と教えてくれなかったという。松代の母親は、母親で一刻も早く縫物を仕上げて一家を支えなければならず、教えている暇もなかったのである。「許しもの」を縫えるのは、裁縫を卒業した人間でも10人1人も習らわなかったと母親は述べている。松代の母親がどのようなところで裁縫を習っていたかは記述がない。キクヨもシズも「許しもの」レベルの腕であったと思われる。松代は満洲へ渡ることになるが、海を渡る花嫁が多かった時代である。

「裁ち縫いは女の仕事であり、嫁に行くにも、器量と健康のつぎぐらいには重んじられたから、好き嫌いど器用不器用はべつとして、ふだん着るものをじぶんの手で仕立てられないような娘は、明治時代にはまずいなかった。裁ち縫いのてほどきはもちろん母親の役目だ。」（大丸・高橋, 2016; 61-63）とあることから、大正の半ばあたりまで裁縫教育の基本は家庭で、「許しもの」レベルまで到達できる女性は家庭とは別に裁縫教育の機会があったと考えられる。

2. 2. サンマイガサネからブライダル・コーディネーターへ

皆合シズの裁縫の腕は相当なレベルであったらしい。もっとも難しいとされる婚礼衣装の下に身に着ける比翼³もシズ自身が縫っている。シズは比翼の上に1916年11月にハワイのカウアイ島で「サンマイガサネ」の婚礼衣装を身に着けることができた数少ない花嫁であろう。「三組の紋付」（バーバラ・川上, 1998; 55）は、白（梅の花）、赤（竹）、黒（松）の順で「三重ねの着物という形ですべてを着た」（同）とある。このような花嫁衣裳は、他の花嫁からは全く聞き取られていない。

シズはハワイで自動車免許を取得し、二世の花嫁たちの婚礼の着付けなど今でいうブライダル・コーディネーターとして飛び回ることになる。きっかけは、1930（昭和5）年に義母が病気で亡くなり、それに伴って夫婦で帰国していたが、シズが病気になり広島で手術をした結果、子どもが持てない体になったことを告げられる。そこで優雅な高島田をつけた花嫁衣裳をみて、婚礼関係の仕事をすることに決めたのであった。それは二世たちが結婚する時期と重なり繁盛した。日系二世の女性たちは高島田に黒留袖（B10, 183, 185, 189, 190）という1930年代に流行った結婚衣装（小泉, 2014）が多い。

1932（昭和7）年に始めたブライダル・コーディネーター料に設定価格はなかったそうだが、新郎側、新婦側からそれぞれ25ドルもらった。もちろん、花嫁1人に20分かかったそうだが、彼女だけでなく、両方の親族の女性たちの着付けもシズが手伝っている。1日に5組も重なると250ドルの稼ぎということになる。車がなければ、島中をかけまわることはできなかったであろう。一方、夫は運転免許はとらないで、好きな釣りに行くのに妻に運転させて行ったり。夫の稼ぎよりも何倍も稼ぐ写真花嫁がいた。

2. 3. リリオカラニ女王の執事を務めた夫；ハワイアンをどう日本人が捉えていたか

リリオカラニ女王の執事を務めたフジモト・ヒコスケは、山口県岩国市の出身で1896年にハワイに来ている。3年契約でHalakau砂糖プランテーションにおいて働いたのち、ワシントン・ブレイスで働いていた友人モリスの誘いでホノルルに移住した。リリオカラニ女王が暮らしていたワシントン・ブレイスには、複数日本人が働いていたことが、ヒコスケの妻キクヨ（B09, 160-173）へのインタビューからわかる。

3 バーバラは、比翼が何かわからないアメリカ人読者のために詳しく説明している。「12月にハワイに到着したので、三層の色重ねに綿の詰め物をしていて、婚礼の着物の下に比翼（1枚で裏がついておらず、袖口と袖に着けられた色のコントラストによって二重あるいは三重ねの着物に見えるようになっている着物）を来た。一世の女性でこのような優雅な下着を持っている人はほとんどいなかったが、カイゴウ夫人はそれを自分でつくった。」（バーバラ・川上, 1998; 56）しかし、この比翼は後に日本に送り返している。あまりに優雅でハワイでは必要ないからだった。

キクヨは1916 (大正5) 年にハワイについた。1988年のインタビュー当時「ワシントン・プレイスは1916年に見た時とそのまま変わっていません。裏庭はとても広くて、その道の途中に我々の家があったの。その地下が我々の家で倉庫も兼ねているようなところでした。日本では布団をしいて床に寝ていたけど、初めてベッドで寝ました」。このベッドに母の兄が持たせた嫁入り道具の布団を敷いたかどうかは記載がない。

フジモト夫妻の暮らしていた場所の上の階は、2組の夫婦がいた。ワタナベ・モンジという料理人で週8ドルと一番稼ぎがよかった。広島からきたオキヒロさんと高山からきた佐藤さんは庭師 (yardman) で、週6ドルであった。そしてヒコスケについて「夫は女王の個人的な必要なものを用意する執事でした。3食提供し、お世話 (errands) を女王が逝去した1917年11月11日まで続けました。週7ドルでした。オキヒロ夫人とワタナベ夫人は王族の方々の洗濯や掃除を担当し、彼女たちは働くとき浴衣を着ていたわ」と述べている。ハワイの王族の家で家政婦をしていた日本人女性は浴衣で働いていた。料理長が日本人だったこともあり、複数日本人が働いていたので食事は日本食だった。一か月4週として21ドルの月収はプランテーションでの一般的な日本人男性労働者とあまり変わらないが、それでもヒコスケの仕事は炎天下の肉体労働ではなかったことを考えると恵まれていたといえよう。

キクヨは、ヒコスケが女王に忙しく仕えていたため、ハワイにきた当初は働かなくてもよかった。ハワイにきた翌年長女テルマ・チヨミを1917年9月1日に出産すると、日本人の産婆に50ドルも支払った。後述するように、5ドルが相場であった時代、それはあまりに高額だと人々は思った。しかし、キクヨにとってはとても産婆の存在は大きかったのである。誰も親戚がいなくて、毎日チヨミを沐

浴させ、新しい母親として何もかも慣れないことばかりだった彼女を助けてくれたお礼の意味もあるようだ。チヨミの誕生は「誰もが幸せ、Hanau, hanau, ハワイ語で生まれた、生まれたって誰もが祝ってくれました。たくさんのプレゼントもいただきました」と回想した。

興味深いのは、チヨミにハワイ語の名前を女王から下賜されたことに対するフジモト夫婦の行動である。ハワイ語で Kealohilani、それは「輝く天国 天国の輝き」という意味で、ワイキキにある通りの名前にもある。しかし、ヒコスケはハワイの名前を戸籍や出産証明に書くと、チヨミがハワイの血を引いていると人々が勘違いすると思ったので、記録しなかったという。チヨミ誕生のわずか2か月後に女王は死去した。ヒコスケは、女王が生前、彼を伴って外出しようとしたが、日本人が隣に乗っていることをハワイの人々がどう思うか心配したようで、父は断っていたと長男クニオは述べている。ヒコスケはハワイ語も大変流暢に話せたようだ。キクヨは「女王はとても優しい人だったようです。日本語教えなさい、かわりにハワイ語を教えますからとっていただければいいですよ。でもそれは私がハワイに来る前のまだ健康的なときだったようです」と述べている。

ハワイの女王に仕え、ハワイ語の名前を娘に下賜されながらも戸籍に記載しなかったり、外出で日本人が女王の傍にいることを周囲はどう思うかを考えるなど、ヒコスケの慎重なふるまいをキクヨや子どもたちはどう思っているのだろうか。

家族写真のキャプションには「女王の死後何年もワイキキにある女王の夏のコテージに暮らすことを許されたフジモト・ヒコスケ、キクヨ」(B09, 167)とあり3人の子どもたちと写っている⁴。余所行きの服を着た子どもたちをみて、子どもたちの服はキクヨが縫ったのかとバーバラは確認している。「まさ

4 左から長男の1919生まれのクニオ、夫ヒコスケ、1925年次女エドナ・ジュンコ (ナカモト)、1921年生れの次男のヒコソ、椅子に腰かけた和服のキクヨの膝の上に抱かれたドロシー・アイコ (1927年)、長女1917年生れのテルマ・チヨミが1枚の写真に納まっている。ヒコスケは白黒写真で白くうつる麻のスーツであろうか、着こなしている。子供たちは、男の子、女の子はお揃いの洋服を着ている。男の子は黒の半ズボンに白の開襟シャツ。女の子はワンピース。みな膝丈のハイソックスをはき、靴もピアノの発表会に履いていけそうである。

か！全部頼んだのよ。近くにドレスメーカーがあって、モリサト夫人、ワシントン・プレイスでご主人が働いていた岩国出身の方は、才能ある女仕立て屋でその方に作ってもらったの。長女のチヨミが大きくなって、縫うようになってからはすべて彼女が作ったわ。靴は夫がMcInery storeで買ったものよ」と説明した。米袋をブリーチしたものを子ども服にしたてることが多かったプランテーションでの生活とは雲泥の差である。娘が裁縫をするようになるのは日本の習慣をハワイにも適用したとも考えられる。

写真花嫁のもとに生まれた長女は、縫物だけでなく家の手伝いをさせられる。白人 (haole) の家で働き始めたキクヨを9歳から手伝っていたのは長女テルマ・チヨミであった。テルマは友達の家遊びに行くときは二人の妹をバギーの中にいれて行った。つまり、子守も彼女の役目であった。学校でも成績のよかったテルマに高校へ進学するよう先生はあったが、9学年で学校を去らなければならなかった。浄土宗の日本語学校に通ってそこで高等科の資格をもらい、後にタチカワ女学校に入った。テルマ・チヨミと夫オノギ・ワラスの結婚式の写真 (B09,171) は、二世の花嫁らしく文欽高島田で肩に柄入りの御振袖で、新郎は黒のタキシードである。3回もお色直しをした。日付は1941年3月31日であり、その年の暮、真珠湾を日本は攻撃した。

長男クニオはハワイの日系人部隊である第100歩兵部隊に入隊し、ヨーロッパ戦線に遠征中イタリアで負傷した。次男のヒコソも第442連隊に志願し、オアフで訓練を受けている間に終戦となった。二人の息子を戦場に送り込む母の気持ちは複雑であった。生まれた国のために志願して国のために戦うことは立派だと思うが、毎朝毎晩お仏壇の前で祈ったという。1982年第100歩兵部隊の記念の祝典で、84歳のキクヨはスピーチをしている。2005年107歳の誕生日を迎えたキクヨの写真は若々しい。ハワイの空港名にもなっている米国上院議員を務めた故ダニエル・イノウエも1924年生れで第442連隊に志願し戦った日系二

世である。

3. 福島県一田沢ハルノ・熊坂カク

3. 1. 姉の存在—新潟出身の夫と福島県出身の妻

1897 (明治30) 年2月2日福島県安達町で生まれたハルノ (B11, 194-204) は、姉の紹介で新潟出身の夫の写真花嫁となった。7年前 (1910年頃) にハワイのオアフ島にあるエワ・シュガープランテーションで働いていた日本人男性に写真花嫁として嫁いでいた姉が、現場監督であるルナを務めていた新潟出身の田沢長蔵の写真を送り、妹の結婚相手にどうかと送ってきたのである。ハルノには既に村から何軒か嫁に来てほしいという縁談もきていたが、姉の勧めを断らなかったのは、田んぼに足を突っ込み働く農家の妻にはなりたくないという思いからであった。後述する福島出身の熊坂カクの姉もハワイにいる。

交換用の写真が2枚収められている。1枚はハルノの家族が長蔵へ送ったもので、ハルノは新潟の夫の実家で6ヶ月過ごしていることから、その前に写したのかもしれない。キャプションには「ハルノはハワイの旅で着るために自分で着物、羽織を縫った。白足袋とげたで装いの仕上げをした。1917年。」(バーバラ・川上, 1998: 57) とある。廬髪ではなく日本髪 of ハルノが縞の着物に羽織姿で手に花を持って映っている。ハルノは1917 (大正6) 年7月にハワイに到着している。もう一枚は姉が送ってきた写真で長蔵は、口ひげを蓄え、右手に扇子を持って立っている。キャプションには「着物と白いおび、そしてよそゆきの緋の羽織を着ている。黒の足袋に草履をはいている。1917年。」(バーバラ・川上, 1998: 57) = (Kawakami, 2016: 197) とある。

ハルノの実家は、バーバラの母親の郷里と村が近く、ハルノのズーズー弁のなまりを理解できたとバーバラは誇らしげに語っている。ハルノは、夫の実家、新潟の言葉が分からなかったそうだ。それでも夫の実家で過ごした半年間は幸せであったと振り返

っている。それほど、ハワイで待ち受けていた人生は過酷であった。ハルノはバーバラのインタビューの依頼を何度か拒んでいた。しかし、バーバラの母親も8人の子どもを抱えて未亡人になったこと、母親とハルノの実家がほんの少ししか離れていないことを話すと許諾してくれた。

ハルノも行李を2つ持ってきた花嫁である。1つにはキクヨ (B09) と同じく布団と丹前という東北地方独特の綿入りの着物の形をした寝具が入っていた。ハルノ自身が織り、縫った紫の綿の緋の着物で下船した。ハッキュー (馬車) で山城ホテルに行くとそこで僧侶が二人の結婚式をあげた。その時にハルノは帯にしっかりと入れてきた結納金の残りを長蔵に渡した。その当時ハンド・バックなど持っている花嫁はいなかった。結納金、長蔵がハルノの両親に送ったものであるが、黒留袖など嫁入り道具を華美なものにしないで、使い切らなかった残りの金額をハルノは長蔵に返したのであった。ハルノの母親の正直さに長蔵は驚いた。タクシーで山の中の砂糖黍畑に囲まれた新居を見た時は、郷里の馬小屋を想起させ、ハルノは落胆した。

ハルノの定位家族については母親と姉以外記されていないので詳しくはわからない。しかし、福島では麦飯であり、ハワイでは白米で贅沢だったこと。福島では11人分を釜で炊いたが二人分を炊くのは難しかったと語っていることから、やはり大家族のなかで育ったようだ。

ハワイに到着して2年後に第一子を身ごもった。ところが、11年後ギャンブル好きの夫が死去する。31歳にしてハルノは未亡人となり、4人の子供を抱え、砂糖黍畑で働き続けなくてはならなかった。家事などをして過ごしたのは到着してたった半年ほどであった。夫の葬式は、夫の地位にふさわしい葬儀を行わなければならない、ギャンブルでお金を使い果し、お財布には35セントしか残っていなかったという。子どもたちは父の葬儀に着る服もなく、米袋を漂白したもので服を作って着せた。

エワ・シュガープランテーションでは、ポルトガル人、プエルトリコ人、スペイン人、フィリピン人、数人のコリアン、沖縄人などがいた。ポルトガル人とスペイン人はHaoleといって白人に近いと認識されていた。彼らとの意思疎通が大変だったと語っている。夫の死後は、畑仕事の後、プランテーションの独身者の足袋などの繕い物を請け負った。針を分厚い生地に通すのは骨の折れる仕事であったが、中国人女性が中国で手に入れてくれたワックスをもらったおかげで、楽になったという。夫がルナの仕事をしていたときは月80ドルの収入があった。砂糖黍畑で男性労働者が一日10時間働いても20ドルほどの月収しかもらえない。ましてや女性はそれ以下だった。

ハルノは出産時、産婆としてきてくれたイガラシ夫人に5ドル支払っている。産婆は2週間赤ん坊を入浴させたり、おしめを洗濯したりしてくれている。ハワイの最後の女王に仕えた夫をもつキクヨが50ドルも産婆に支払ったことと比較すると、キクヨの夫が女王に仕えていた頃の生活水準がいかに高かったかがわかる。

夫の葬式から1年後の1928年、ハルノと4人の子どもたちがうつっている写真が掲載されているが、ハルノ自身白のブラウスに白のスカート、目を悪くしたのか眼鏡をかけている。男の子2人は白のシャツに半ズボン、女の子は白のワンピース、全員白のハイソックスに、靴を履いている。キャプションに「女の子たちは、父の葬式に漂白した米袋を着た」(B11, 202) とあるが、この写真の白い服が米袋だとは思えない。わざわざ米袋を着せて写真をとるだろうか。ハルノの腕時計が見えるように撮影している。夫の遺品であろう。かなり大きな腕時計である。夫がルナであったことを示したかったのではないだろうか。

生活が苦しかったにもかかわらず、ハルノは夫の死後11年目の1939年、日本へ既に亡くなっていた両親の墓参のため一時帰国している。往復は65ドルだった。ハルノの記憶力は脅威的であるとバーバラは

述べている。

3. 2. 結納金

バーバラはインタビューの最後に、夫サシチはい人だったかと聞いた。熊坂カク (B01, 15-39) による以下の回答は、夫の親族全体の印象と重なる。

「とんでもない。サシチはスウィートでもなく、思慮深くもなく、やさしくもない。家のことは何も手伝わない。何もできない典型的な日本の男だよ。男というものは何もしないものだ。いやいやいや。今だってもし私が先に死んだら、何もできない。私が死んで、夫が子どもたちのところにやられるだろうけど、彼らはつらい時期を過ごすことになるよ。狂うだろうね。夫は90になるけど、ストーブひとつ消しやできない。嫁いで60年以上がたつけど、わたしの胃が悪かったときだけ、自分で自分の食事をつくったが、それ以外なにもしたことがない。あ、そうだった初めて赤ん坊を産んだときに夫は料理に挑戦したね。1週間だけ弁当つくって仕事にいったよ。彼にはきょうだいも妹もハワイにいたが、誰も手伝いに来やしなかったね。(B01, 37-8)

1899 (明治32) 年10月24日生まれ旧姓コンノ・カクは、バーバラ自身の母親の里の近くの村、福島県伊達郡出身である (B01, 15-39) ことから、バーバラはこのカクに母親の面影をみていたのかもしれない。(1) で紹介した斉藤 テイ (B05)、ハルノ (B11)、カク (B01)、バーバラの母の4人は現在の福島県福島市に隣接するエリア出身である。

カクの定位家族は、大家族である。両親には8人の娘と2人の息子がいて、4人目によく生まれた男の子の後の5番目がカクであった。カクが生まれた頃に祖父が死去し、祖母が同居することになっ

た。この祖母が厳格な人でカクのハワイ行きを反対するだけでなく、盆踊りにすら女の子たちを行かせようとしなかった。村人から「おはるおばあちゃんが、また娘 (孫) たちの後をついていくよ」と言われたぐらいであった。女兒が次々と生まれたからであろう。長姉だけが6年まで学校へ行った。義務教育が6年制になっても、あとの女兒たちは4年までしか小学校には行けなかった。1907 (明治40) 年に義務教育が6年に延長されている。カクが小学校にあがる2、3年前、家が貧しく、子どもたちは農業や養蚕を手伝う必要があり、カクは他の農家に子守に行ったりしていた。文部科学省によると、義務教育の女子の就学率は1908年頃には9割を超えている⁵が、6年まで通える女子生徒が9割もいたのかは疑問である。

姉も楽園のハワイに行きたがっていたが、両親が許さなかった。姉は結局、カクの夫クマサカ・サシチの兄と結婚してハワイへ渡っていたため、カクがハワイへいく3年前に母親が死去したときは実質、カクが幼いきょうだいの面倒をみる必要があり、父親もカクがいないと困ると言い続けたため、21歳になるまで結婚ができなかった。夫のおばが間に入り、実質的には姉が姉の義弟とカクの結婚を取り持ったことになる。1920 (大正9) 年に撮影された交換用の写真は、西洋的な椅子の前にカクは縞の着物姿で立っている (B01, 20)。83歳になる祖母は、最後までカクのハワイ行きに大反対したが、父親が結婚を決めた。ハワイの渡航費は夫の父親が支払ってくれた。この時代は紫が流行っていたのだろうか紫色の紋付一揃をもらい、結納金は10円で米ドルに換算すると5ドルであった。だが、この10円は、カクが入浴していたすきに、夫の実家で盗まれる。夫の父親の再婚相手が犯人であると思われる。夫からすれば継母であるが、意地悪であった。魚を買っても、自分で料理し自分で食べるだけで、継子には食べさせ

5 文部科学省ホーム・ページ 文部省調査局 1962「日本の成長と教育」(昭和37年度)より
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_011.html (2019年8月20日アクセス)

なかった。カクが未来の夫に食べさせようと干し柿を用意していたが、義継母はそれを取って売ってしまった。結納金の10円は贈り物だと思っていたが、実は借金であったことが後に判明する。

義父は、1911（明治44）年にオアフのシュガープランテーションで働き、息子であるサシチは1912年に16歳でハワイへきている。夫の妹は、田沢長蔵がルナを務めるエワ・シュガープランテーションで働いていた。夫の定位家族は、ハワイのプランテーションで働く一家でもあった。だが、ハワイでカクが出産する際、夫側の親族の協力はなかった。

カクは義父と横浜まで汽車に乗っていった。横浜のホテルには、ホノルルへ向かう他の写真花嫁と一緒に、英語を教えてもらい、覚えた英語は「グルモーニング、グルエブニング」だけだった。

1922（大正11）年の3月にハワイについたときカクは22歳になっていた。28歳の夫は2日後に迎えに来たが、その間は移民局のベッドで寝た。ワイパフには夫の兄がいて、小さい家で一つのベッドに義兄夫妻と子どもたちが寝ていた。

サシチのボスであるルナ木村文五郎は、同じ福島出身（バーバラの母方の親戚にあたる）である。Pump Four Camp（別名Camp Seventeen）の独身男の世話（食事・洗濯）は、木村夫人がみていた。カクたちの披露宴をキャンプの女たちを差配して宴会をしきったのも木村夫人である。

披露宴では、男たちが黒のスーツに白いシャツ、ボウタイをしていることにカクは驚いたという。お祝いとして綿の浴衣の反物（1巻1ドル）をもらったときはとても嬉しかった。カクがミシンを手に満面の笑みを浮かべている写真がある（B01, 34）。それは1922年ハワイに着た時、夫が買ってくれたシンガーミシンで当時100ドルしたのだという。10時間の労働の後、このミシンでなんでも縫った。このミシンはロスアンジェルスの日系人博物館に息子トシミによって寄付された。縫い方は木村夫人から習ったという。カクは、山口からの2人のように裁縫の学

校に行ったとは証言していないが、雪で閉ざされる冬に、絹糸を紡ぎ、糸から着物を織るのは女の子の仕事で、カクは13歳から訓練を受けたとっている。母親は大変厳しかったようだ。貧しい農家の娘は、手芸など贅沢なことを習っている暇はなかったという。

1929年の家族写真（B01, 35）もあり、長女八重子は白いワンピースのような子供服を着て、麦わら帽子に靴をはいている。5, 6歳のはずであるが、随分八重子は幼くみえる。1929年生れの息子トシミはお宮参りの衣装であろうか着物で帽子を被り、カクの膝に抱かれている。カクは白黒写真で色はわからないが紫の着物ではないか。扇のような柄が見える。カクは椅子に腰かけ、夫はスーツに縦縞のネクタイ、胸ポケットから鎖がでているので、懐中時計かもしれない。

オアフ・シュガー・カンパニーのHans L'Orangeはサンタクロースの恰好をして、どのエスニック・グループ（ハワイアン、中国人、スペイン人、ポルトガル人、日本人、プエルトリコ人、フィリピン人、コリアン）の家族にもプレゼントを配った。年に一度だけアイスクリームを食べられる日だった。カクは1964年に65歳で退職するまで砂糖黍畑で働いた。フィリピン人の女性が「ママ、どうしたの、そんなに早く老けちゃって」といった。「どうしてこうなったのだろう、みじめな気がして、やめた」と退職理由をつぶやいた。

退職するまで給料の半分は日本に送金した。義父が必ず帰れといったので、ハワイでは土地も買わなかった。送金したお金は、夫の親族に使われていたことが後に判明する。日本人と結婚した娘は隠居部屋を福島で作ってくれたらいいが、寒いから福島では暮らしたくないとハワイに留まった。88歳でカクは死去し、何もできない夫は、その1か月後、後を追うように亡くなった。

結納金10円は借金だった花嫁もいれば、夫から送られてきた結納金を使って嫁入り道具を整え、残っ

たお金を夫に返した花嫁もいる。支度金に2000円もかけてもらった花嫁もいる。結納金ひとつとっても、写真花嫁の階層は、多様だったといえよう。

4. 熊本県—登喜タガと菊川綾子

4. 1. 二百三高地・紫の婚礼衣装・姉の手縫いムウムウ

旧姓イノクチ・タガ (B12, 205-217) は熊本県八代郡早尾町に1901年9月23日に生まれた。きょうだいの人数が明確ではないのだが、真ん中の子であるという。兄が隠居した父の代わりをつとめている。明治時代は農村の女の子は後に6年に拡大された義務教育のうち3年か4年ほど通うのが普通であったとバーバラも述べている。タガは学校では抜群の成績だった。担任や校長先生までもが彼女の家を訪ね、町の高等学校へタガをやるように兄を説得したのだが、兄は「おなごが教育を受けすぎりゃ、誰も嫁なんぞにとらなくなる」と言った。3日間誰とも口を利かなかったタガだったが、隣のハツコさんと思った。彼女は小学校に行けなかった。次々生まれるきょうだいの世話をしなくてはならなかったからである。両親は畑仕事をしていた。ハツコさんは赤ちゃんを負ぶって、紐でくくり、学校の玄関先で先生の講義を聞いていた。ハツコさんを思うと、兄の暴言の痛みがすこしやわらいだ。少なくともハツコさんがいけなかった学校の6年生を優秀な成績で卒業したのであるから。小学校を卒業すると、タガは花嫁修業にあけくれた。ここでも彼女は、女性の公式な着物を縫うだけでなく、男性の伝統的な着物や袴を縫うことができたことで抜きんでいた。

一方、登喜亀蔵は、カウアイ島のLihue sugar plantationで父と暮らしていた。彼はハワイで生まれている。彼の母は、彼を産むと亡くなり、父は砂糖黍畑で働きながら、子どもを育てることはできなかった。亀蔵を日本に帰した。八代の(球磨川の近く)祖父母のもとで亀蔵は育てられた。バーバラは生後3か月で熊本からハワイに渡るが、亀蔵は、

ハワイ生まれですぐに熊本に帰国させられ、その後またアメリカへ渡っている、いわゆる帰米である。15歳まで熊本の山の中で育った。おじが、石の彫刻を教えてくれ、後にハワイで役立った。15歳のとき、父は砂糖プランテーションで亀蔵を働かせる決意をした。少年はすぐにハワイアンを覚えた。バーバラのインタビュー時にも、ハワイの歌を歌ってくれたほどだ。

亀蔵はハワイの女の子はエキゾチックで魅力的で、結婚する機会もあったが、若すぎたという。亀蔵の父が彼の将来を考え始めたが、あの時代に異なるエスニック・グループとの婚姻は聞いたことがなかった。そこで日本にいるおじ(剣道の師範)に依頼し、おじは6年生を優秀な成績で卒業した17歳のタガを見つけた。タガの兄は、妹が写真花嫁になることに興味をもっていることを知っていたので、合意し、写真と手紙を交換するようになる。

亀蔵の交換用写真は、ユニークである。ハンチング帽を被り白シャツの上に長めのカーディガンを着て、そのポケットに片手を突っ込んで立っている少年である (B12, 207)。写真花嫁へ送った大半の男たちのように一張羅の背広を着ていない。バーバラは、タガに「写真を初めてみた感想は?」と聞いた。「写真が我々の村につくと、家族は歓声をあげた。17歳の私は恥ずかしくて見ることもできず、誰もいない枕元でみた。彼はハンサムだと。禿げてない。今みたいにね!」と答えると皆が笑い、禿げ頭を亀蔵はなでてみせた。一方亀蔵は「22歳だしね、落ち着くころだなと思ったよ。自分たちの場合は二つの写真で結婚したんだ。君たちが今日のようにロマンティック lavu lavu (ハグとキス) とは違うよ」(B12, 208) と答えた。インタビュー時の写真は、亀蔵が彫刻したと思われる石と盆栽をバックに、二人ともサングラスをかけている。亀蔵は、ドラゴンボールの亀仙人というキャラクターにそっくりである。亀蔵の写真花嫁になってよかったかとバーバラに質問されると、タガは温かい笑みを浮かべて亀蔵に一札す

ると「パパ、ありがとう」と言った。熊坂カクと対照的である。

亀蔵のおじから花嫁としての要請を受けた時、タガは興奮した。タガの姉もカウアイ島のプランテーション労働者である一世に嫁いでおり、彼女はときどきお金を送ってきてくれて、天国のような島でのわくわくするような生活について書いてくれていた。タガもパラダイスへ行って、働き、他の移民のようにお金を稼ぐことに憧れを抱いていた。

福島 of ハルノも熊本のタガも姉の存在が大きい。この写真花嫁のピークの時代は、家族・親戚がすでにハワイにいる、あるいは海外での経験があり、憧れをよりかきたてられているといえよう。

仮祝言は両家を取り持ったおじの家で行われ、フォーマルな5つの紋が入った紫色の着物で裾に刺繍がほどこされた衣装を着た。高島田を結うかわりにタガは「二百三高地」という日本髪を結った。1905年の日露戦争の激戦地の名前である。バーバラは、その髪型は「1890年代にフランスでもともと起源のあるポンパドールで、20世紀はじめに日本でも流行し、その名は旅順港で1905年の日露戦争の激戦地の丘をさしている。その丘がポンパドールの髪型のように丸い。戦地から帰った兵士が名付けた」(B12, 208)と説明している。

明治期と1920年代後半(昭和初期)以降の結婚式を比較すると衣装をふくめスタイルにいくつかの違いがあると『日本人のすがたと暮らし』では指摘している。明治期の婚礼の中心は杯事で、男女が向かい合って、三々九度の固めの杯を交わすことが、夫婦関係の成立を意味した(大丸・高橋, 2016: 369-397)。写真花嫁たちの郷里で夫不在で行われた婚儀は、この三々九度の杯事が言及されている。明治期は角隠しよりも綿帽子が多く、綿帽子なら高島田に結わなくても隠れる。婚礼衣装も、裾襠や振袖の着

物は明治期のさいしょのうちは婚礼に着なかったとある。1920年代から生まれた新商売の貸衣装屋のおかげで、振袖の衣装が広まったようだ(同)。つまり、写真花嫁がハワイへ渡った1920(大正9)年前後は、婚礼衣装の変革期であったと考えられる。

明治の後期に女学生に流行った束髪が、20世紀に入ると廂髪(ひさしがみ)と呼ばれるように、前髪に入れ髪をして、こんもり丘のようになっていく。それが、日露戦争により、二百三高地として一般にも広がりを見せたようだ⁶。写真花嫁たちの写真は皆同じような髪型をしている。髪結いに行かなくても自分たちで結うことのできる髪型だったということではないだろうか。

ハワイへ嫁ぐことに興奮したタガであったが、郷里を離れるときは辛かったようだ。母の最期の言葉「タガ、あなたのベストを尽くしなさい。自分を大事にね」だった。駅まで父、兄たち、姉妹たちは見送りにきてくれたが、母の姿はなかった。「玄関先で、エプロン(前掛けであろう)で涙をぬぐっている母を覚えています。68年も前の話ですけどね」と。「私は汽車が動き出すと希望がなくなりました。八代の谷や丘が視界から消えていきました。初めて汽車に乗ったのですが、長崎まで旅をしました」。ほとんどの花嫁にとって、初めての汽車であり、初めての船だった。

1918年⁷11月22日タガがホノルルに着いた。亀蔵は父から「お前のワヒネ(ハワイの言葉で女性)を連れてこい」といわれカウアイ島からオアフ島へいくボートに5時間も乗って迎えに行く。「そうだな。どんな容姿であろうと、これはシカタガナイ」(B12, 210)と言い聞かせた。タガの第一印象は「なんて足のでかいワヒネなんだ!」である。足だけでなく、体もタガは大きい。体が大きいにも関わらず、その体を活かして上手く働くことができなかった。砂糖

6 ポーラ文化研究所「やさしい日本髪の歴史 第22回廂髪」にはイラスト入りで掲載されている。https://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/hair/22.html 2019年8月23日アクセス。

7 『ハワイ日系移民の服飾史』には「トキ[登喜]・タガも日本とハワイの両方で結婚式をした一世の花嫁のひとりである。タガは一九一七年に八代から来た。」(バーバラ・川上, 1998: 72)とあるが、1918(大正7)年が正しいと思われる。

黍畑で夫と連携しながら砂糖黍を運ぶ作業をハパイコといったが、いつも上手くできなかった。それでも亀蔵は腹を立てなかったという。タガは、八代で農作業をしたことがなかった。同じく熊本の鹿本郡米野岳村からきた旧姓丸山綾子（B13）も同じく蚕に餌の葉っぱをやったことはあっても農作業をしたことがなかった。綾子はタガとは反対にとっても小柄で華奢である。

タガは亀蔵にも仮祝言で着た紫の結婚用の着物を見てもらいたかったようだ。ところが、(1)で紹介したように、1918（大正7）年タガの姉が縫ってくれたムウムウを着て結婚写真を撮ることになる。その日亀蔵とタガは彼の母親の墓参りに行って、結婚したことを報告した。その道すがら写真をとったのだが、写真を撮ることをタガに伝えていなかったのである。

タガの紫の着物を孫娘が着ている写真が掲載されている（B12, 213）。牡丹の花が三輪配され、17歳の娘が着るには地味な印象をうける。結婚後の用途も考え、銘仙など訪問着のような普段より上等な着物を結婚式用にハワイに持参したのではないだろうか。二世の花嫁たちが纏った黒留袖、柄の入った大振袖のような着物ではない。

4. 2. テニスと指輪

バーバラがインタビューした当時の菊川綾子（B13, 218-235）は、手を膝の上で重ね、上品で小柄な老婦人である。Wahiawa 本願寺の第一婦人会でも活動的な女性のひとりであったのであろう。綾子は前列はほぼ中央で、手に数珠を握り、さらに手を重ね写っている（B07, 130）。ルナとなった夫をもつ広島出身のサワイ・フユノのほうが、2列目にいる。

交換写真も廂髪に縞の着物、西欧風の椅子に腰かけた綾子の手はおそらく重ねてあるのであろう。だが、白いハンカチがかぶせられ、手が露わにはなっていない。明治の頃の写真は、手を着物に隠して映っていることが多いが、手を露出することへの忌避

が20世紀にも続いているらしい。B01のカクは花をもつことで手は隠れている。山口県岩国出身のキクヨはショールで手を隠し、B11のハルノは花が枝に咲いているものを持っているため手はみえる。熊本の登喜タガ、山口の皆合シズの交換写真が掲載されていない。

ハワイで夫と写した結婚写真のキャプションには「シトクとキクガワ・アヤコの結婚写真。アヤコは紋付、金糸の紋織の帯。いずれも彼女の父親から送られたもの」（バーバラ・川上, 1998; 59）とある。何色かは書いてないが、黒ではないようだ。夫のフロック・コートの方が黒い。結婚式にしては、控えめな印象で、孫娘が着たタガの婚礼衣装と同じように、派手さはない。さらに、夫を雇っていた吉田夫人が借りてきた西洋のドレスを着て綾子は写真に納まっている。「借り着の服を着ているキクガワ・アヤコ。ブラウス、スカート、カマーバンド、帽子、靴の一揃いがそれになる。彼女は花婿から結婚指輪を贈られた数少ない一世の花嫁のひとりである。写真屋はその指輪に気づいて、指輪がみえるようにと、彼女の手を出させた。1918年 キクガワ・アヤコ所蔵」（バーバラ・川上, 1998; 60）とある。

1899（明治32）年生れの綾子が所蔵していた写真のなかで、珍しいのは12歳のときの小学校の写真である。キャプションには「小学校5年のマルヤマ・アヤコのクラス写真。熊本県鹿本郡米野岳村撮影。アヤコは前列右から3番目。」（B13, 221）とある。女子生徒は緋の着物に袴をはいている。一人だけ膝の上に手を載せている生徒はいるが、袴の中に手をしまっている。学生服を着た男性が4人いるが、大学生ぐらいである。着物を着た男性2人、中央の二人は洋服である。センセイは圧倒的に男性なのであろう、1人女性教員が端に座っている。女子生徒の大半は桃割に髪を結っている。男子生徒も着物であるが、同じ帽子をかぶっている。女の子16名、男の子20名。1911（大正元）年頃と思われる。

写真からは想像できないほどお転婆娘だった旧姓

丸山綾子の定位家族についてみてみよう。村の外れに暮らしていたが、町にも近く買い物もできた。山も近くて椎茸やワラビを摘みに行った。けっこうな藁葺き屋根の家に暮らし、養蚕農家に囲まれていた。

1901（明治34）年綾子が6歳のときに母親が死去する。享年37歳であった。写真花嫁関係者の母親あるいは義母が30代で死去する例が多い。当時の女性にとって、出産は大きなリスクであったからであろう。生死にかかわるお産を、親族から離れ、異国の地でしなくてはならないことに不安を感じていた花嫁もいる。母親が死亡すると父親はほぼ再婚している。綾子を含め3人の子供を育てるのに父は困り、父の姪である中山カモと再婚し、異母兄弟ができた。その結果7人の子どもの真ん中に綾子はなった。継母は優しい人で継母は綾子のことを、幼くして母を亡くしたので気の毒に思っていたのだろうと綾子という。どんなに忙しくても、毎朝髪を櫛削り、桃割れに結ってくれたのだという。

父親は役場にも務めていた。数学や書道に優れていた。蚕の農繁期が終わると、村の女の子たちは、村のお寺に着物、羽織や袴を縫うことを覚えるために送り込まれたという。継母は絹を巻き取り、いろいろな織方ができる名人で彼女の緋は皆に喜ばれたという。彼女が織った絹の反物は京都に染色に出され、そこで美しいデザインの着物になった。そのおかげで綾子は美しい着物をハワイに持ってくるのができた（綾子の着物はロスアンジェルスの日系博物館に永久コレクションとして納められている）。

綾子は、スポーツが得意だった。男の子はフットボールをしていたらしいが、綾子はテニスの試合にでたという。私事ながら、1905年生れの出雲の祖母がテニスの選手だったと言っていたが、綾子が熊本でテニスをしたのは祖母よりも前になる。活発な女の子は、友達の家が遅くまでいたのであろう。綾子は兄によく尻をたたかれた。味噌が嫌いな姉には、彼女が夜眠っているときに口のなかに味噌を突っ込んだという。

綾子最大のお転婆は、困っている叔母の力になろうと、叔母の息子を説得して日本に連れて帰ろうとハワイへ旅立ったことだった。綾子の語りをそのまま引用しよう。

「叔母、つまり父の最初の従姉妹、後に義母になる叔母が問題を抱えていたの。ハワイにいる長男の至徳に写真花嫁として予定していた女性かね。そう美しい女性だった。交換用の写真は白の結婚式用の着物をきていたわ。それを至徳のところへ送っていたの。」

「養子に入らなければならなかった男とその女性は駆け落ちしたの。養親は彼を離縁して、見つけ出した。彼らは問題にいろいろ直面して、彼は彼女と離婚したの！彼女は泥を塗ったから実家には戻れなかった。そこで至徳の花嫁になってハワイに行くことを望んだ。この件について父と叔母が相談してたのね。私はその女に腹が立って、そんな女をハワイに行かしちゃだめよ、叔母さん、って。」

「だから、私がハワイにいて、至徳を説得して、日本に連れて帰ってくるって言ったの。信じられる？あの女をハワイに行かせたくなかったの。そんな大胆な態度に私がでるなんてね」といって悪戯っぽく笑った。

叔母は「そんなこと、一ヶ月や二ヶ月ではできないのよ」といったが、「おばちゃん、心配しないで。ハワイにいて、至徳さんを連れて帰るから。」

「ハワイが遠くなんて知らなかった。隣村にでもあるような感覚だった。あんな度胸があったなんて！」

「その後至徳と私が熊本に里帰りしたとき、その女性は結婚できなかったみたいで。申し訳ない気がしたわ」（B13, 222）

駆け落ちに失敗した女性は、ハワイへ嫁ごうとす

るも、綾子の企てにより至徳との結婚にも失敗し、一生独身で暮らしたようだ。父と叔母は綾子の態度をみて、綾子こそ写真花嫁として至徳へ送り込むことを決めたのであるが、綾子は父と叔母の計画を全く知らなかった。しっかり交換用の写真を彼女が旅立つ6ヶ月前に撮影しているところから、綾子を菊川の戸籍に入れるなど着々と準備を父と叔母はしていたようだ。

バーバラは候文で書かれた綾子の父からの手紙を1985年のインタビュー時に読んでもらっている。それを英語にしてあるものを、邦訳するので、候文ではないが、当時の父親が娘の結婚相手である至徳へ宛てた手紙を引用する。

至徳殿、

私の娘綾子は良い教育を受けたこともなく田舎育ちです。娘はよき妻としての役割を果たすことができないかもしれませんが、どうか娘が十分な役割を果たす妻になるまで我慢して下さいることをお願い申し上げます。二人が長く幸せな人生を過ごすことを祈ります。どうぞよろしく。

敬具 父丸山 (B13, 228)

1918(大正7)年は日露戦争、第一次世界大戦の後で、良妻賢母教育が強まった頃であるが、バーバラは「良妻賢母」という言葉を使って分析することはない。「謙譲の美德」をローマ字でしるし、「奥ゆかしさは美しさである」と英訳している。

至徳はフィッシング用のボートを嵐の日に沈没させ、400ドルもの借金があったため、里帰りできたのは、第二次世界大戦後になった。子どもたちと一緒に里帰りをしたようだ。ハワイへむけて娘夫婦と子供たちが熊本を離れるとすぐ父は手紙を認めている。

至徳と綾子殿、

秋になり涼しくなりました。山々も美しい秋

色でおおわれています。皆無事にハワイへ帰ったことと思います。かわいい孫たちをみて感動しました。綾子と至徳がよく育てていることにも驚きました。今頃長崎をでて神戸にいるころでしょうか。ハワイへ行く途中かもしれませんし、ハワイかもしれません。本当に熊本へ家族と帰ってきてくれてありがとう。皆達者で。

敬具 父丸山 (B13, 229)

戦争で亡くなったのであろうか、綾子の兄や姉は父より先に亡くなったという。このとき綾子が父をみた最後となった。

綾子のお転婆ぶり、父と娘の関係をみると、封建的な父の姿を想像することは難しい。至徳の「写真花嫁」にさせられたことに綾子が憤慨したような記述もない。珍しいケースであるので、バーバラは「バイシャクニンはどこでなりましたか?」と聞いている。父の従兄弟で父とともに1893年カナダのプリテッシュ・コロンビアに行ったことのあるキヨシであった。父は熊本に帰ったが、キヨシはハワイに留まった。お転婆綾子の父も冒険心のある青年だった。綾子にとってハワイはまさに隣村のような感覚であった。父親のカナダでの経験が、冒険心あふれる娘綾子の人格形成に大きな役割を果たし、ハワイを心理的に近くに感じていた原因なのではないだろうか。

小結

田中景は、1915(大正4)年にYMCA東京本部から太平洋岸州の在米日本人コミュニティ視察のために派遣された河井道子の報告書をもとに考察している(田中, 2002: 303~334)。恵泉女学園の創始者でもある河井道(子)は、1912年にYMCA同盟の総理事に就任し、後に婦人平和協会の第二代理事長に就任している。

どのような日本人女性が「写真花嫁」として海を渡ったかについて河井は、2種類の「写真花嫁」を

区別している。まず「田舎に於て農夫或いは漁夫に嫁する女子」である。彼女たちは鹿児島、山口、福岡、熊本、和歌山、山梨県の農村や漁村出身の、教育水準の非常に低い女性で、ハワイに移民した後、同郷出身の日本人労働者たちのもとへ嫁いだ純粹の日本の極田舎から米国の田舎へ移住してきた。彼女たちは、妻でもあるが「労働力」として夫ともに農作業などを行っている。そのため花嫁たちが家事や育児を怠って共稼ぎをしており、それは「米国人の最も嫌厭する処」と河井は主張した(田中, 2002: 310)。

2種類めの「写真花嫁」は、都市の日本人労働者のもとに嫁いだ花嫁で、「高等教育を受けた野心家で、浮ついた気持ちの為に身を持ち崩してしまったり、金儲けに走ってしまったりで、健全な家庭を築くことが出来ず、結局は排日運動を助長」(田中, 2002: 311) している存在と河井は見なした。

前回福島的女学校を出たB05齊藤ティを紹介したが、浮ついた気持ちなどなく、むしろハワイに出稼ぎに行く男たちは低い階層だとみなしていた。また、河井道(子)が1915年に見た「教育水準の非常に低い女性」とした女性たちは今回考察した花嫁よりも前にハワイへ移民し、その後アメリカ本土へ渡った「写真花嫁」たちである。

写真花嫁たちの教育水準については、小学校教育を3, 4年まで受けたものから6年、さらには高等科あるいは裁縫を学んだ女性たちもいる。養蚕を手伝っていた女性たちで、農作業を経験したものはどちらかというと少数であった。ハワイ到着後、女王に仕えた夫に嫁いだ女性や、ルナに嫁いだ女性を除いて夫ともに労働するのは「当たり前」であった。

一方、キリスト教的な白人中産階級の「良妻賢母」に影響を受けている河井には、ハワイへ嫁いだ写真花嫁も育児をほったらかして労働しているアメリカの白人なら「最も嫌厭する処」の日本人として映った。

一方、炎天下のなか朝から晩まで身を粉にして働きつづけた彼女たちに対してバーバラは畏敬の念を

抱いている。ラクエンだと思っていたハワイに着くと、労働力として期待されていたのだという現実を目の前にして、何年も働かないでいた花嫁はいない。また、花嫁だけが苦勞しているわけではなく、夫も重労働であった。母が畑仕事をしているときは、長女が幼い弟妹の面倒をみている。その光景は、日本の農村に嫁いでも、同じであったろう。

定位家族に着眼しただけでも、日常のディテールに配慮したインタビュー記録である。本稿では、1890年代後半の出生コーホートの花嫁たちで、1916～1918年というピーク時にハワイへ到着した山口、福島、熊本出身者を考察した。この頃には親族の誰かがすでにハワイへ嫁いでいたり、労働者として働いていた経験があることがわかった。花嫁の定位家族は2,000円の支度金を使った階層から、小学校を4年を通うのを止めざるを得ない階層まで多様であった。今回は沖縄からの花嫁を考察する予定である。

生殖家族形成後の彼女達の人生は残念ながらあまり紹介できていない。同時代を生きたバーバラならではの調査であり、原作が多くの人に読まれることを願うものである。

【参考文献】

- アームストロング、ウィリアム・N・アームストロング (荒俣宏・樋口あや子共訳) (1995)『カラカウア王のニッポン仰天旅行記』小学館
- 飯田耕二郎 (2003)『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- 飯田耕二郎 (2013)『ホノルル日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- 石川友紀 (2005)「沖縄県における出移民の歴史及び出移民要」『移民研究』1；11-30
- 嘉本伊都子 (2019)「海を渡る花嫁への一考察 (1) —バーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通して—」『現代社会研究』21；p67-83
- 川上寿代 (1994)「ハワイ王室縁組問題」大口勇次郎、五味文彦編『日本史史話 3』山川出版社；77-80
- 川上, バーバラ・F (香月洋一郎訳) (1998=1993)『ハワイ日系移民の服飾史 緋からパラカへ』(神奈川大学常民文化叢書5)、平凡社 = Kawakami, Barabara F., (1993) *Japanese Immigrant Clothing in Hawaii, 1885-1941*, University of Hawai'i Press
- 工藤美代子 (1983)『写婚妻 花嫁は一枚の見合い写真を手し海を渡っていった』ドメス出版
- 小泉和子編 (2014)『昭和の結婚』河出書房新社
- 島岡宏 (1978)『ハワイ移民の歴史：新天地を求めた苦難の道』国書刊行会
- 島田法子編著 (2009)『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』明石書店
- 大丸弘・高橋晴子 (2016)『日本人のすがたと暮らし 明治・大正・昭和前期の身装』三元社
- ロナルド・タカキ著；富田虎男, 白井洋子訳 (1986=1985)『パウ・ハナ：ハワイ移民の社会史』刀水書房
- 田中景 (2002)「20世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業—日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 68；303-334
- 田中景 (2004)「女性の市民的役割と『写真結婚問題』」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 72；149-171
- 田中景 (2006)「『写真花嫁』の写真：移民の可視化と移民政策の実行についての考察」『県立新潟女子短期大学研究紀要』(人文・社会科学編) 43；261-270
- 鳥越皓之 (1988)『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社
- 鳥越皓之 (2013)『琉球国の滅亡とハワイ移民』吉川弘文館
- 中野卓 (1995)『口述の生活史、ある女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房
- 真壁知子 (1983)『写真婚の妻たち カナダ移民の女性史』未来社
- 宮本なつき (2002)「契約移民時代のホノルル日本社会と日本人売春婦」『比較文化研究』(九州大学大学院社会文化研究科) 12、47-57
- 宮本なつき (2005)「明治の渡米熱と女性たちの『亜米利加』像—渡米出版物から見た日本人移民女性史の一考察」『移民研究年報』11；61-80
- 宮本なつき (2007)「砂糖黍畑の女たち—ハワイ日本人移民女性と1920年のオアフ島第二次ストライキ」『ジェンダー史学』3；19-31
- 矢口裕人 (2002)『ハワイの歴史と文化 悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論社
- 柳澤幾美 (2003)「『写真花嫁』問題とは何だったのか—その言説の形成を中心に」『異文化コミュニケーション研究』(愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻・言語文化研究所) 6；11-24
- 柳澤幾美 (2005)「ハワイにおける『写真花嫁』問題：日本政府の対応を中心に」『金城学院大学論集・社会科学編』1(1-2),180-193
- 柳澤幾美 (2006)「ハワイに渡った日本人『写真花嫁』たち：最初の『写真花嫁』から最後の『写真花嫁』」まで『金城学院大学論集社会科学編』3(2), 129-141
- 柳澤幾美 (2004a)「『写真花嫁』移民禁止の経緯—日米外交の視点から」『移民研究年報』10；97-107
- 柳澤幾美 (2004b)「二重の偏見 —『写真花嫁』イメージに隠された日本人女性移民の実像—」田中きく代・高木(北山) 眞理子編著『北アメリカ社会を眺めて—女性軸とエスニシティ軸の交差点から』関西学院大学出版会；145-163
- 柳澤幾美 (2009)「『写真花嫁』たちのオーラル・ヒストリー—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより—」『海外移住資料館研究紀要』3；61-73

英文

- Kawakami, F Barbara (2016) *Picture Bride Stories*, University of Hawai'i Press
- Tanaka, Kei (2008) "Photograph of Japanese Picture Brides: Visualizing Immigrants and Practicing Immigration Policy in Early Twenty Century United States," *American Studies* (American Studies Institute, Seoul National University) No.31- 1

